

体育振興

連帯意識が格別に高い金戸は、体育の面に於いても青年会が中心となり大いに發揮された。昭和五二年度（会長江大作）青年会が金戸地区運動会を計画し、川田ニットのグラウンドで実施した。地区の援助も受けない強行開催であり参加人数も心配されたが大盛況であった。予約していた弁当が店の倒産で届かず、南砺の弁当店を片っ端から探しかき集めたエピソードは今も語り継がれている。翌昭和五三年（会長盛田正則）も開催するか臨時總會を八月一日に開き、お盆の一五日に第二回の運動会を農協会館が建設される空き地で実施した。金戸地区単独での運動会には帰省客も墓参りもそこそこに飛び入りで参加し、誰でもこなせる競技にした。年数を重ねる事に熱が入り応援団も結成されて、老いも若きも真夏の炎天下で走り転びあったのであった。金戸はそれ以前から城端地区の各種スポーツ大会にも参加しておりスポーツに関心が高かった。

金戸に刺激されて昭和五十七年から

南山田地区運動会へと発展し、金戸地区と同じ八月一五日に実施することになり金戸の運動会は五回で終了した。

金戸はそれ以前から城端地区の各種スポーツ大会にも参加しておりスポーツに関心が高かった。金戸のスポーツ振興は地区の青壮年層の絆を深めるものとして、昭和五六年ごろから城端駅伝・ソフトボール・野球・町民体育館での各種大会など幅広いスポーツにも参加するようになった。

金戸地区内でのソフトボール大会が昭和五九年に開催されたこともあったが、昭和五六年に南山田スポーツ振興会のナイトソフトボール大会に参加してからは常勝地区となり、昭和五九年に初優勝して以来、平成一九年までに一〇回の優勝、四回の準優勝を重ねたように向かうところ敵無しであった。地区もスポーツ振興に理解を示し、昭和五五年にソフトボール助成を決議している。

平成二一年度からは大会がナイトから昼間に時間が変わり、勤務するに支障があり参加を差し控えている。

ソフトの選手は城端野球連盟主催の町民野球大会にも参加し平成十三年に初優勝して以来常に上位に位置し、平成十三・十六・二十一・二二年に優勝しており、平成一八・二三年は準優勝

する最強の地区となった。

金戸スポーツクラブ誕生

金戸が綱引で名を馳せるようになったのは、昭和六二年一二月に富山県綱引選手権にバレーボールユニホームとシューズで出場し、いきなりベスト8に入るという快挙を成し遂げ、翌年の一月に金戸スポーツクラブを結成してからである。結成の目的は綱引競技を主として「アマチュアスポーツの振興を図り金戸の地位と名誉を高め村人の心身の健全な発達に寄与する」とし、会長に品川千寿が就任し会員は男子三四名・女子一六名でスタートした。二月には、女子チームも誕生し朝日芳子が代表となった。

早速に二月の南砺農協綱引大会・六月の富山県農協共済綱引大会に参加した。七月に綱引シューズ・ユニホームを揃え同月の城端綱引大会に男子が優勝した。十一月の砺波地区農協青年部綱引大会にも優勝するのであった。

活動は綱引の他にビーチバレーボール・ソフトボール・野球・バレーボール大会に参加した。平成元年には桜ヶ池一週駅伝にも挑戦し参加した二チームが二・三位に入賞した。

輝かしいスタートであったが全県下

の大会や全国大会の壁は厚かった。平成六年からは綱引きのレベルの向上と選手の広域化を進めてクラブの拡大をめざし、「金戸スポーツクラブ」から

「城端綱引きクラブ」と改名した。

それ以後の活躍は全国を目ざすクラブチームとなり優勝・入賞の戦績は枚挙にいとまがない。スポーツ振興に果たした活躍に対するチームや指導者表彰も数限りなく受賞している。

綱引きを通じての活躍は国内外の交流にもおよんでいる。

甲子園球児

平成二一年夏の甲子園に福野高校生盛田尚暉君が出場した。シード校を次々に破り、日替わりヒーロで勝ち上がった福野高校球児の活躍が昨日のように思い出される。決勝戦では高商を盛田・上田の気迫の継投でしのぎ、九回に三点差をミラクル大逆転した興奮は永く語り継がれることであろう。試合が雨天で何度も順延となり北陸道の途中から引き返したことも楽しい思い出となった。

投打に活躍した金戸のヒーロ盛田尚暉君とは、細身でおとなしく、礼儀正しい子であるが、持ち味は変化球でコースを際どく突く投球とマウンドでの

冷静さが光ると評された。慎重な性格からくるのであろうか。

手伝いで鍛えた体力

村中が盛田尚暉君の甲子園出場に涌いた記憶が新しいが、過去には多くの若者がスポーツに汗を流し群体や県体・インターハイや国体に出場している。金戸の高倉寛治は城端町体育指導員として町のスポーツ振興に寄与してきた。高校では陸上部の所属し日々トレーニングに励む生活であったが、卒業後の昭和四九年発足の城端町体育協会に属し郡体や県体や中部大会等に活躍するかたわら後継者の育成に関わった。とくに城端町駅伝には第一回から二六回まで中心的に関わり続けた。町技であるスキートの鍛錬に駅伝は都合がよくスポーツ少年団・中学生・高校生の町外の参加も増え続け県外からの参加もあった。

生徒達の頑張りに刺激されて町内の職場からのチーム参加も増えた。兼松の職員であった品川千寿は、自分たちも参加せんとチームを結成し、駅伝を始め各種球技大会に参加し始めたこと、後の金戸スポーツクラブ結成につながるものであった。

戦後の混乱期は金戸の子供達は、一

年中農作業を手伝い足腰を鍛えていたので体力は並外れたものがあつた。学校の部活動でいきなり試合に出ても、途轍もない力を発揮することが多々あつた。金戸でも盛田正則は県中学校陸上八〇〇に出場し優勝し、冬にはノルデック競技でも優勝した。

雪国で育つた子供達は冬はスキーが唯一の楽しみであり、近くの立野ヶ原スキー場や中学校での体育がスキーのノルディックであつた。戦前では金戸出身で城端小学校教諭であつた中川孝久が、大正七年一月に立野ヶ原スキー倶楽部の前身である筏スキー倶楽部の創立に関わつた。スキー熱が高まるなか城端区域工場従業員スキー大会が開催されて杉本利（岸機場）が昭和一年の第一回大会に参加して優勝したり、松田昭夫などが富山県スキー選手権大会に出場している。戦後に於いても富山県民体育大会スキー競技会に松田昭夫・源元光夫が出場しており、高松宮杯中部日本スキー大会に源元光夫は昭和30・31・33年度に出場し活躍している。

家業に従事するために選手を目ざすことはなかつたが、彼らが青年会の中心的なメンバーとなつて金戸の体育振興に果たした役割は大きく、その子弟も幅広い活躍と戦績を残している。